

# 大学アーカイブズにおける オーラルヒストリー収集手法

## —聖路加看護大学の事例からの考察—

新 沼 久 美

### 【要 旨】

聖路加看護大学の大学史編纂・資料室では2006年から収集したオーラルヒストリーのデータ45件分を保管している。これらのオーラルヒストリーの収集手法を分析し、課題を検討することを通して、大学アーカイブズにおいてオーラルヒストリーを収集するにあたり必要となる作業について考察した。大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの位置づけを大学組織運営の経営知としての資料、大学活動の主体者である学生（卒業生）の活動に関する資料の2つに限定して捉え、そのうえで大学アーカイブズでオーラルヒストリーを収集する際には、実施概要の作成、本人校正、公開・保存の同意書取得、データベース化、利用規程整備が必要な行程としてあげられることを示した。

### 【目 次】

1. 本稿の目的
2. 考察の前提
  - (1) オーラルヒストリーとは
  - (2) 大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの位置づけ
3. 分析対象の事例
  - (1) 聖路加看護大学におけるオーラルヒストリー収集事業の概要
  - (2) 背景
  - (3) 目的
  - (4) 組織
  - (5) 収集するオーラルヒストリーの性格
  - (6) 本学におけるオーラルヒストリー収集の意義
4. オーラルヒストリー収集手法の分析
  - (1) 聖路加看護大学におけるオーラルヒストリー収集手法
  - (2) 聞き取りの対象選定
  - (3) 聞き取りの環境
  - (4) 聞き手
  - (5) 質問項目と関連資料
  - (6) 説明と同意

(7) 逐語録作成と本人への確認

(8) 記録の作成と保存

(9) 記録の利用

## 5. 考察

(1) 本学におけるオーラルヒストリー収集の課題

(2) 大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリー収集の手法

(3) 今後の研究課題

## 6. 結語

## 1. 本稿の目的

本稿は、聖路加看護大学（以下、「本学」という）の事例を通して、大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの収集手法のありかたを考察するものである。

大学アーカイブズとは、大学の活動記録を収集・整理・保管・公開する組織や施設を意味し、そこに集められた記録資料そのものも指す。大学アーカイブズの重要性は、近年、大学改革への要求とともに高まっているといえる<sup>1)</sup>。ところが、本学のような小規模大学においては、十分なアーカイブズの体制整備は容易ではない。特に建学からの歴史が長い場合、マンパワーに比して対象とする資料範囲が広く、現存する大学史資料の組織化や収集の方針において、どこから着手すればよいか判断がむずかしい。

本学では、アーカイブズのコレクションを形成する足がかりとして、卒業生のオーラルヒストリー収集の事業を開始した。本稿においてこの現状を報告し、課題を分析したうえで、大学アーカイブズ一般のオーラルヒストリー収集手法のありかたを考察する。

## 2. 考察の前提

まず本稿におけるオーラルヒストリーという言葉の定義を示す。その上で、他大学におけるオーラルヒストリー収集事例を引きながら、現在の日本において大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーがどのような位置づけにあるのかを確認する。

### (1) オーラルヒストリーとは

オーラルヒストリーの明確な定義は難しい。社会学、人類学、民俗学、心理学等の分野においても口述の資料を収集し研究に用いる手法があり、それらは聞き書き、ライフヒストリー、ライフストーリー、インタビュー等の表現で言い表され、オーラルヒストリーとの違いは諸説ある。オーラルヒストリーは聞き手の自由な語りに主眼をおいた「深い語り」であるとの考えもあれば、テーマを絞った質問による史実の検証研究に用いる場合もあり、また文書資料の補足と捉える考え方もある。本稿では、オーラルヒストリーとは記憶に基づいた体験者本人によ

---

1) 寺崎昌男「大学改革その先を読む」『立教大学「大学教育開発・支援センター」連続セミナー講演記録』東信堂、2007。

る口述記録、として広くとらえることとする。

歴史学において、オーラルヒストリーという手法で収集された記録は、その信頼性について批判を受け、文書資料と比べて資料として劣るものと位置付けられてきた。しかしトンプソンによる指摘以降、文書資料も主観に基づいて作成されており、信頼性はオーラルヒストリーも文書資料も同等であるという考え方を支持する立場も見られる。また口述資料が文書資料よりも実証性に劣るところがあるとすれば、それは他の研究者によって同じデータを用いた追検証の機会が保証されていないという、資料環境に起因するという指摘もある<sup>2)</sup>。本稿では、オーラルヒストリーは歴史を紐解くうえで有用な資料であり、文書資料や複数の口述資料等と照らし合わせた検証を必要としながらも、その信頼性は文書資料に劣らないものであるとの立場で考察を進める。

オーラルヒストリーのありかたも定型を示すことは難しい。対象者を一人設定して、その人物の生い立ちから経歴を時系列に語ってもらうケースもあれば、ある組織における文化についての証言を組織に所属する複数の人物から集めて全体像を描こうとする試みも、オーラルヒストリーに含まれる。対象者の設定や実施手法が様々で異なる性格のオーラルヒストリーが実施されているが、それらは以下のような性格に分類することができる。(1)聞き取り対象となる人物の人生全体を扱うライフヒストリー、(2)特定の事件や時代などのテーマを設定して聞き取りを行うテーマオーラル、(3)特定の組織や集団の構成員に対し、網羅的に聞き取りを行う組織オーラル<sup>3)</sup>、(4)個別の事例について関係者を一堂に会して行う集団オーラル<sup>4)</sup>、の4分類である。

また聞き取り対象者の属性がマイノリティ／エリートかでオーラルヒストリーの性格を捉える視点もある。従来、社会的マイノリティと考えられるグループの歴史を知るために、オーラルヒストリーの手法が用いられてきた。例えば少数民族、女性といった社会的マイノリティとされるグループの歴史が、マジョリティが作成する文字資料の中に残されてこなかったため、口述で記録を作成する方法が有効であるとされてきた。一方で、政策実行の経緯を政治家や官僚から聞き取り、閣議録等の文字資料には残されなかった意思決定プロセスを明らかにするといった研究があるが、これらはエリートオーラルと呼ばれる。近年、現代史においてエリートオーラルが活用され、活発に研究が行われている<sup>5)</sup>。

2) 梅崎は、「現在、オーラルヒストリーを使った研究成果が他の研究者によって資料を使って批判されるという文書資料ならば成立しうる研究環境が未整備である。実際のところ、多くの研究者がオーラルヒストリーの実証性に対して不信感を抱えているが、その不信感は口述資料そのものではなく、資料を取り巻く環境へ向けられるべきものである。」と指摘している。(梅崎修・田口和雄「Regional Oral History Office (ROHO) のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』2012, p.75-85)。

3) 和田華子・芹澤良子「東京女子高等師範学校卒業生を対象としたオーラルヒストリー—大学史資料としての可能性」『アーカイブズ学研究』2011(14), p.18-33。

4) 清水唯一郎「オーラル・ヒストリーの実践法」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007, p.121-5。

5) 御厨貴「オーラル・ヒストリーとは何か」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007。

## (2) 大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの位置づけ

近年多様な分野でオーラルヒストリーを用いたとされる研究が行われており、オーラルヒストリーという研究手法が珍しいものではなくなっている<sup>6)</sup>。しかしオーラルヒストリーで収集された語りの全体がわかる形で公開されている例は少ない。研究の資料とするためにオーラルヒストリーを収集しても、得られた内容全てを論文や報告書に掲載することは難しく、聞き取られた内容のごく一部を引用したり語りの分析結果だけをまとめることしかできないからである。オーラルヒストリー全体が公開されるには、逐語録刊行や口述資料そのものの閲覧提供等の大掛かりな事業が必要となる。研究者個人が収集したデータの受け皿となるオーラルヒストリー・アーカイブズが日本国内で普及していない現在<sup>7)</sup>、収集されたオーラルヒストリーの多くは研究者個人の管理下にあると推察され、他研究者への共有機会が提供されていない。また将来的には各研究の完了をもって音声データから逐語録まですべてのオーラルヒストリー資料が廃棄される可能性が高い<sup>8)</sup>。

実践の場だけでなく、アーカイブズ学という理論上でのオーラルヒストリーの位置づけは、議論が始まったところである<sup>9)</sup>。安藤は「記録のない過去の「記憶」を掘り起こしこれを記録化すること、また現代の人間活動のうち記録が残らない部分をとりあげて記録化すること、これもまたアーカイブズ活動の重要な一部」としつつ、「アーカイブズ活動の一環としてのオーラルヒストリーは、公開利用が最終目的となるため、歴史学研究や民俗学研究の手法としての聞き取り調査とは、考え方も方法も異なるはずである」としてオーラルヒストリーをアーカイブズ学における今後の研究課題に含めている<sup>10)</sup>。

安藤らの指摘ののち10年が経過し、組織立ったオーラルヒストリー収集に関する検証や、海外のアーカイブズにおけるオーラルヒストリー収集事例の報告が蓄積されているが、中でも大学における実践事例から、大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの位置づけを探りたい。

まず大学におけるエリートオーラルとも言える、意思決定のケーススタディとしてのオーラルヒストリー収集の例として九州大学の取り組みを引く。九州大学大学史料室では元副学長のオーラルヒストリー1件を収集して記録を保存した。大学改革と新キャンパスへの移転という

6) 科学研究費助成事業データベースで研究課題名に「オーラル」「ヒストリー」を入力して検索すると、新規採択年度が1999～2003年度では2件だったものが2004～2008年度で10件、2009～2013年度では24件と、オーラルヒストリーを中心に据えた研究の増加が見て取れる (<https://kaken.nii.ac.jp/> 検索日：2013.9.4)。

7) 野本らによるインターネット検索調査では、2003年2月時点日本国内に学術機関が運営しているオーラル・アーカイブズは見つからなかった。(野本京子「各国におけるオーラル・アーカイブズに関する中間報告」『史資料ハブ地域文化研究』2003(1), p.90-4)。

8) これについて梅崎は「そもそも、口述資料の作成が研究業績としてあまり評価されない現状では、音声の書き起こしをするという労力が報われることは少なく、調査者の必要に応じて書き起こしをしない、もしくは部分的な書き起こしが行われることが多い。つまり、学界内に自分以外の研究者に資料を公開するインセンティブ・システムが存在しないのである。」と分析している(前掲注2)。

9) 加藤聖文「アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』下、柏書房、2003、p.215-35。

10) 安藤正人「アーカイブズ学の地平」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上、柏書房、2003、p.166-86。

巨大プロジェクトの意思決定過程やそこに存在する暗黙知、組織の力学などについての語りを収集し、大学改革のための経営情報の1つとして位置づけている<sup>11)</sup>。

次に学生の目から見た大学像・歴史を浮かび上がらせる手段としてのオーラルヒストリー実践例として、以下の2例をあげる。京都大学では、学生の視点から見た学徒出陣についてのオーラルヒストリー収集を行い、研究成果を報告書として刊行している。収集対象者は大学在学中に学徒出陣を経験者した17名で、授業や余暇の様子から戦争に対する認識等、何気ない日常や心情の語りから当時の学生たちのありのままの姿を浮かび上がらせることを目的としている<sup>12)</sup>。またお茶の水女子大学では、大学院生の研究活動として卒業生のオーラルヒストリー収集を実施している。大学アーカイブズが実施主体ではないが、大学の財政的支援等を受けながら継続され、また実施者たちは将来的な大学史資料としての保存・利用を見据えて、同意書を取る等の対応をとっている。これらの2例では、学生（卒業生）のオーラルヒストリーは大学活動の主体者である「学生」の視点によって生み出された資料として大学史資料において重要な存在と位置づけている<sup>13)</sup>。

以上の事例から、1) 大学組織運営の経営知としての資料、2) 大学活動の主体者である学生（卒業生）の活動に関する資料、の2つのありかたが示されている。大学アーカイブズとは大学の公的な意思や諸政策の執行過程を表す「組織運営のための資料」を扱うことが基本要件にあげられるが、大学は学生、教職員、卒業生らの研究教育や課外活動をはじめとしたさまざまな個性的な活動によって成り立っており、それらの記録も含めてこそ大学の軌跡全体を描くことができる<sup>14)</sup>。特に、大学活動の主体は学生である。よって大学アーカイブズでは学生の活動に関する資料も主柱の一つであるべきだと考えられる<sup>15)</sup>。この考えをオーラルヒストリーに当てはめると、1) の大学組織運営資料としてのオーラルヒストリーは大学アーカイブズの基本要件を満たすための資料の一部であると考えることができる。また大学活動の主体者である学生（卒業生）の活動資料としてのオーラルヒストリーもまた大学アーカイブズの主柱の一つであるべきと言うことができる。

大学という組織においては、多様な研究分野で多様なオーラルヒストリーが実施されているが、本節での考察より大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーとしては、1) 大学組織運営の経営知としての資料、2) 大学活動の主体者である学生（卒業生）の活動に関する資料、の2つのありかたを考えるとと言える。

11) 報告書には「内容から公開は時期尚早」として収集されたオーラルヒストリーについてはまとめも分析も掲載されていない。（新谷恭明『大学アーカイブ機能についての基礎的研究—「大学改革」との関連において』科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書、2004）。

12) 西山伸「京都大学における「学徒出陣」—聞き取り調査から—」『京都大学大学文書館だより』2005（9）、p.6-7。

13) 前掲注3。

14) 西山伸「『大学アーカイブズ』の現状と今後」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイブズ』京都大学学術出版会、2005。

15) 前掲注3において、和田は「大学運営の実態や、大学の社会における役割、アイデンティティーを探ろうとするとき、学生（卒業生）側からの視点は、必要不可欠な要素」とし、大学アーカイブズにおいては「組織運営のための資料」だけではなく「学生および卒業生の活動に関する資料」も主柱の一つとされるべきと指摘する。

### 3. 分析対象の事例

#### (1) 聖路加看護大学におけるオーラルヒストリー収集事業の概要

さて、大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの位置づけを筆者なりに捉えたところで、これまでに本学で行ってきたオーラルヒストリー収集事業の実施手法を見直し、その課題を洗い出すことで大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリー実施手法のありかたを考察したい。そこでまず、本学におけるオーラルヒストリー収集事業の概要について述べる。

本学では、大学史編纂・資料室委員会（以下、「大学史委員会」という）により、卒業生を主な対象としたオーラルヒストリーの収集を行っている。2006年度から開始され、2013年8月までの7年半で45件が収集されている。事業期間の設定はなく、大学アーカイブズとしての通常資料収集の一部として位置づけられている。

#### (2) 背景

本学は、東京都中央区に位置する、看護学部・看護大学院のみの単科大学である。キリスト教の宗派である聖公会の宣教医トイスラーによって、聖路加国際病院付属高等看護婦学校として1920年に開校した。2013年現在で創立から93年が経ち、輩出した卒業生・修了生は約4500名になる。草創期の卒業生たちは全国の看護実践の指導者となり、全国の看護教育の開拓者となり、また看護行政の分野で看護婦の地位を確立するのに重要な役割を果たすなど、日本の看護史において大きな影響を及ぼしている。

オーラルヒストリー収集事業は、2005年度に学内で行われた講習会において、寺崎昌男氏によって年史編纂の準備としてオーラルヒストリー収集の重要性が指摘されたことが発端となった。本学は長い歴史がありながら、アーカイブズの組織が明確に設置されていなかったため、資料が散在し組織化されていなかった。そこで可能な限り卒業生から聞き取りデータを集めることにした。このデータは、今後の資料収集方針や現存する資料整理の優先順位を決めるうえでの判断材料となると考えられた。

緊急で収集する必要がある高齢の卒業生1名から優先的に収集に取りかかることになり、2006年度に1件のオーラルヒストリーを収集した。この取り組みにおいて従来の年史などには記録されていなかった内容が語られ、オーラルヒストリーは資料として価値があるという認識が学内で共有され、2007年度から継続してオーラルヒストリー収集が行われるようになった。

#### (3) 目的

2006年度7月の大学史委員会議事録において、以下のとおりオーラルヒストリー収集の目的と内容が定義されている。

##### [目的]

聖路加看護大学の歩みの中から、以下を明らかにする。

- ①日本における看護教育の歩み
- ②日本における看護研究の歩み
- ③日本における医療の中での看護の役割

④当時の日本および世界の潮流の中での日本の医療看護の位置づけ

⑤看護を生業とすることの時代的な意味（個人のライフ・ヒストリーの中での職業としての看護）

〔内容〕

具体的な聞き取り内容としては、学生時代の経験（経過と思い出に残るエピソード、社会背景と学生生活）、看護師・助産師・保健師としての看護実践における経験、聖路加と私、看護と私（他看護学校卒業生に接することにより、知りえた聖路加の文化、私を支えた「聖路加」、実践を継続し革新へと駆り立てた思い）などを質問項目として用意する。

以上のとおり、本学におけるオーラルヒストリー収集は、本学の年史編纂の資料とすることだけを目的とせず、広く日本の看護史に資することを目指している。また目的として明文化されていないが、聞き取り内容からは、学生生活の実態や、記録文書からは読み取れない本学の文化、卒業生の人生において大学が及ぼした役割などを浮かび上がらせようとしていることが読み取れる。

#### （４）組織

本学の組織体制として、大学アーカイブズの資料収集・整理・保管・公開の実務を担うのは大学史編纂・資料室（以下、「資料室」という）であるが、オーラルヒストリー収集事業は、資料室の諮問委員会である大学史委員会が行っている。理由として、まず資料室が2008年度に設置される以前から大学史委員会の前身である大学史編纂・資料室検討委員会においてオーラルヒストリーの収集活動が開始されていた経緯がある。さらに資料室は非常勤教員1名・兼任職員1名の体制であり、オーラルヒストリーを実施するのに人手が足りないことがある。一方で卒業生の語りを聞くことは大学の教育活動・運営に示唆を与える貴重な経験であり、多くの教職員が携わることは意義があるといえる。大学史委員のうち5～6名程度の教員が2年の任期（再任を妨げない）で交代するため、これまでに多くの教員がオーラルヒストリー収集に携わる結果となっている。資料室がオーラルヒストリー収集の事前準備など事務作業を担いつつ、実際の収集・分析作業においては委員が協力するという体制が、学内に歴史学等を専攻する研究者が不在である本学の現状において最も適した状態となっている。

特筆すべきなのは、聖路加看護大学同窓会（以下、「同窓会」という）の会員が、委嘱委員として大学史委員会に参加していることである。これにより同窓会との連携が密になり、オーラルヒストリー収集を始め、資料収集事業全般の効率が向上していると考えられる。

#### （５）収集するオーラルヒストリーの性格

2-(1)において、オーラルヒストリーをその性格によって4つに分類できると述べたが、本学においてこれまでに収集されたオーラルヒストリーは、まず組織オーラルの性格を持つと言える。本学の卒業生を対象としていること、本学の歴史や組織文化を明らかにすることを目的としているためである。実際に収集されたどの語りからも、本学の組織文化が浮かび上がり、大学が残してきた記録文書からは読み取れない史実などが明らかになるなど、大学の歴史をたどるための資料として価値を持つ。

ただし、創立以来看護学の専門教育を行ってきたこと、戦後の看護改革において本学および本学の卒業生が重要な役割を担ったこと等、本学の看護界における位置づけを考えると日本看護教育史等のテーマオーラルの性格も併せ持つことが指摘できる。聞き取り対象者の選定に卒後のキャリアを考慮していることもあり、学生から見た大学の歴史だけを収集対象としているわけではなく、日本の看護教育や行政がどのように変わっていったかの経緯を聞き取ることも目的としているためである。

卒業生1人を対象としたケースでは、個人のライフヒストリーにおける学生時代の思い出や母校の印象、卒後の業績と本学から受けた影響などについて充実した語りが得られた。一方同じ学年の卒業生数名のグループを対象としたケースでは、当然個人のキャリアや思いについて語る時間が少なくなるが、在学中のできごとや授業内容について複数人によって検証されながらの語りが得られた。

また語りを収集した卒業生は、同時に本学の教員経験者であるケースも数件あった。ライフストーリーを聞き取っていく過程で、学生という立場から見た学園像と、その後の教員として大学運営に関わった記憶の両方が収集される結果となった。これは戦前の教育制度における専門学校としての看護教育機関が本学しかなく、戦後しばらくの間、大学教員の資格を持つ人材に占める本学卒業生の割合が高かったという特殊な事情がある。

以上のように、本学の収集してきたオーラルヒストリーは組織オーラルでありテーマオーラルであるという前提に立って実施されつつ、実施方法によってライフストーリーか集団オーラルのどちらかの性格を有するものとなった。また学生・卒業生としての視点での語りを収集していく中で、大学運営者としての視点での語りも収集されたが、それと意識して行われていたわけではなかった。

#### (6) 本学におけるオーラルヒストリー収集の意義

本学におけるオーラルヒストリー収集は、小規模で長い歴史をもつ大学のアーカイブズにおけるコレクション形成の足がかりとして開始された。情報が少なかった戦前・戦中・戦直後の時代について卒業生から聞き取りをすることで、大学史委員がその時代の学生生活の日常をイメージできるようになった。それは卒業生から寄せられた写真やノートなどの資料の内容を理解する基礎知識となり、資料整理の際の価値判断基準となった。卒業生の語りからわかったことをもとに調査が始まり、学会発表につながった例もある<sup>16)</sup>。このように本学のオーラルヒストリーは、まず大学史委員会がアーカイブズ活動を行う上での、歴史を理解するための基礎知識を得るために大きな役割を果たしている。

また上で述べた以外にも、オーラルヒストリーが本学のアーカイブズにおいて果たした役割がいくつか挙げられる。まず公的な記録だけではない多様な視点から歴史を描くための資料となっている。卒業生による語りからは、大学が管理・保管してきた記録文書からは読み取ることができない、大学事業の実態や学生生活の様子などが明らかになるのである。さらに本学のアイデンティティ確認の参考資料としても存在意義が大きい。複数の語りに共通して見られる

16) 小野若菜子「戦時下の鹿児島県における聖路加女子専門学校卒業生の公衆衛生看護活動」『日本看護歴史学会 第25回学術集会 講演集』, 2011, p.54-5。



学園文化や大学への帰属意識を浮かび上がらせることで、本学のミッションが実際には学生にどのように受け継がれているのかがわかる<sup>17)</sup>。このように捉えると、本学のアーカイブズにおいて、オーラルヒストリーはもはやコレクション形成の足がかりとしてだけではなく、学生（卒業生）の活動が読み取れるまとまったコレクションの1つとして、その地位を確立していると言える。

#### 4. オーラルヒストリー収集手法の分析

##### （1）聖路加看護大学におけるオーラルヒストリー収集手法

本節ではオーラルヒストリーの収集手法について、本学で2013年度8月までに行ってきた具体的な方法を述べる。この事例を手掛かりに、第2節で示した大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの位置づけ、すなわち1) 大学組織運営の経営知としての資料、2) 大学活動の主体者である学生（卒業生）の活動に関する資料、としてのオーラルヒストリーを収集するために必要な方法を次節で考察する。そのため、本節中で本学特有の目的や事情に起因する方法は対象から排するための分析を行うこととする。

##### （2）聞き取りの対象選定

これまでに実施した聞き取りは45件、のべ128名に及んでいる。本項ではこれらの対象者をどのように選んだかを述べる。

オーラルヒストリー収集を開始した2006年度に、聞き取り対象の候補者35名をリスト化した。リスト作成は、同窓会より推挙してもらう方法を取った。推挙の基準は、時期として戦前・戦中・戦直後から1953年までの卒業生を中心にし、卒後の活躍分野として看護行政・看護教育・看護実践（医療現場、保健活動含む）で特徴的な働きがあった人物とした。

対象者が皆高齢なので、とにかく聞き取りに応じてもらえる人物から収集していくこととした。2006年～2008年度は、特に戦前に卒業した世代からの聞き取りを優先し、各学年に数名しか残っていない健在者へのコンタクトを急いだ。2009年度からは健在者が多い戦直後卒業の世代を対象として、同学年から2～5名集まってもらうグループインタビューも始めた。こうして2013年8月現在までの7年間で、リストの35名中19名から語りを収集した。

このように同窓会で卒後の活躍が把握できている人物を対象者に選定することから始まりはしたもの、聞き取りから得られた情報を元に新たな対象者を選定したり、対象者の一人に同級生でグループインタビュー参加者を紹介してもらったりして、リストに名前のない卒業生や中退者にも選定の範囲を広げてきた。卒業後の活躍を資料室や同窓会で全く把握していなかった方が新聞に載り、本学の卒業生であるということで急遽対象者として選定されたケースもあった。このように多様な選定基準を持つように心がけ<sup>18)</sup>、常に選定対象者を見直している。

17) 和田は「大学の社会的評価や存在意義を、卒業生のライフヒストリーにおける大学の位置づけという視点から探る上では、オーラルヒストリーは重要なツール」とであると論じている（前掲注3）。

18) 桜井は収集内容の偏りを防ぐための対象者選定方法として雪だるまサンプリングを紹介している。（桜井厚『インタビューの社会学—ライフヒストリーの聞き方』せりか書房、2002）。

課題としては、本学との関係が稀薄になっている卒業生の声を収集することが後回しになっていることがあげられる。収集作業の人的コストに制約があることから、インタビューの実施件数は年間5～6件までとしている。よって卒後も看護界において何らかの活躍がある人物が優先され、早くに家庭に入るなど看護職としての経歴が短い卒業生は対象としにくい。また本学で学んだ時代を懐かしく思い、同窓会活動にも協力的な人々からばかり聞き取りを行うと、本学への帰属意識が薄かったり、教育内容に否定的だったりする声が収集から漏れる危険性があることを、より意識して選定を行う必要があるだろう。また卒業生以外からのオーラルヒストリー収集が未検討であることも指摘される。大学運営上重要な役割を果たした教職員（例えば学長、学部長、研究科長、事務局長等）からのオーラルヒストリー収集は、現在の大学の姿を知る上で価値があることが検証されている。また本学と関係の深い聖路加国際病院の医師や看護師等、実習場という教育関係者の立場からの語りも貴重な証言となると考えられる。

### (3) 聞き取りの環境

オーラルヒストリーの語り手の希望に合わせて、大学内で実施する場合と、語り手の自宅または自宅近くの施設に会場を用意して実施する場合がある。自宅で実施することは、慣れた場所でリラックスしてもらいやすいこと、語りの途中でアルバムやノートなどの資料を随時提示してもらえするというメリットがある。しかし人手と予算の都合から訪問は当日1回が限度であることが多く、録音や録画に適した環境（静かさ・明るさ・電源の有無等）を事前に確認できないのが難点である。一方自宅外で実施することは高齢の卒業生には移動の負担が大きく、夏の暑い時期は実施を控えるなどの制約も生じた。しかし大学で実施する場合、現在の大学の様子や歴史展示などの資料を見てもらうことができ、「変らない聖路加の伝統」「街並みから思い出される学生時代のエピソード」などの語りが収集される効果があった。本学は1996年に現校舎が竣工し、聞き取り対象者の多くにとってなじみのない姿に変わってしまっているが、創立以来同じ地域にあるため、大学に来訪してもらうことで、土地に根ざした記憶が甦ることは期待できる。あくまでも語り手の都合を優先するが、より深い語りを得られる場所を選ぶよう心がけている。

### (4) 聞き手

聞き取りの席に参加する大学史委員の人数は特に定めてはいないが、総勢で3、4名であることが多い。主体となる聞き手を1名定めるほか、聞き取り中のメモを作成する記録担当者を1名、録音・撮影機材の操作の担当を1名確保するようにしている。実施場所が聞き取り対象者の自宅である場合、大勢で押し掛けると迷惑になるため、以上の3名程度にとどめるようにしている。実施場所が学内である場合は、先にも述べたように、多くの教職員が卒業生の語りを聞くことが望ましいという観点からも、できるかぎりの大学史委員が加わる。またこれまでの対象者は1953年以前の卒業生が主であったため、語りの時代背景などが理解できる人物ができるだけ列席するという観点から、年配の大学史委員が補助的な聞き手として参加するようになってきた。このようにして聞き取りの席に参加する人数は、最大では10名にまで及んだこともある。

オーラルヒストリーの聞き手は3名がよいとされる。理由として、専門分野の異なる聞き手

によって多方面からの質問をするメリットがあること、または戦前・戦後・現代の知識を持つ年代別の聞き手によって、視点の異なる問いかけができることなどが挙げられる<sup>19)</sup>。この点、本学のオーラルヒストリーは複数名が列席しているとはいえ、役割分担を持って聞き取りを行っているという明確な意識は共有されていない。無言で座っているだけの列席者がずらりと並んでいると、対象者に威圧感を与える危険性もある。今後は常に列席者の役割分担を明確にしつつ、対象者と大学史委員会の信頼関係の状況によっては、必要最低限の人数にとどめるよう気をつけたい。また聞き手3名各人の目的と目標も事前に確認して共有するとよいとされる<sup>20)</sup>。すべての参加者が「多様な語りを引き出すために自分がどのような質問・働きをするとよいか」を明確に意識して臨むだけで、収集される語りの質が異なってくるであろう。本学では今まで複数人の聞き手による役割を事前に明確にすることは少なかったが、グループインタビューの場合だけは聞き手の一人を「司会」と位置づけるようにしてきた。これは聞き手各人の目的明確化のためと言うよりは、語り手に対する司会の権限提示を狙った対応である。聞き取り対象者が複数人いると、お互いの発言に触発されて発言が活性化され、場合によっては話題の逸脱が大きくなって聞き手による軌道修正が必要となるケースが見られたからである。司会という役割を語り手に明示することは、語りがある程度コントロールされることについてあらかじめ断りを入れたことになり、話題の軌道修正が起こったときに語り手側に生じる不満感が軽減されると考える。

#### （5）質問項目と関連資料

卒業生からの聞き取り方法の標準化のため、質問項目の一覧を用意している（表1）。これは、聞き手が大学史委員会・資料室の中で持ちまわりで行われていること、大学史委員は3年程度

表1 聖路加看護大学オーラルヒストリー収集の標準的な質問項目

- ・経歴について
- ・聖路加の学生時代、印象に残っていることはどんなことですか？
- ・就職してからの聖路加国際病院での臨床で印象に残っていることは何ですか？
- ・看護・教育に携わって、印象に残っていることはどんなことですか？
- ・看護・教育において、大変だったこと、困ったことはどんなことですか？
- ・看護・教育において、うれしかったこと、楽しかったことはどんなことですか？
- ・今までうれしかったこと、幸せに感じたことは何ですか？
- ・つらかったこと、苦勞されたことはどのようなことですか？
- ・生きていくうえで一番大切にされてきたことは何ですか？
- ・今の看護師に伝えたいことは何ですか？
- ・今の看護教員に伝えたいことは何ですか？
- ・看護学生に伝えたいことは何ですか？
- ・先生にとって看護とは何ですか？看護師とは何ですか？

19) 御厨貴『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』中央公論新社、2002。

20) 永江朗「インタビューの技術」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007。

で交代することなどから、聞き取り内容の方向性がある程度統一するためである。また同時に、個々の聞き取りに即した個別の質問項目も用意する。対象者の業績からその分野のトピックについての質問を用意したり、在学時代に合わせて教育内容に焦点をあてた質問を増やしたりする。これはグループインタビューで特定のテーマについて情報を収集しようとする際に、特に必要となる。こうして標準的な質問項目に個別に用意した質問項目を加え、各聞き取りのつどオリジナルの質問予定項目一覧を作成している。

作成した質問予定項目一覧は、必要に応じて聞き取り対象者に事前に提示している。理由は、対象者がインタビュー実施に同意はしたものの「何を話してよいのか見当がつかない」「自分に話すことがあるだろうか」等のとまどいや不安を口にするケースが往々にしてあるためである。質問項目をあらかじめ目にするすることで、インタビューの大体の流れが予測でき、対象者の不安がある程度軽減できている。

質問項目と一緒に、記憶を呼び覚ますきっかけとなるよう、本学の略年表や既刊の年史に収載されている卒業生による母校の思い出随筆などを抜粋して事前に送付している。同時に、聞き取り対象者個人の履歴を事前に作成してもらえよう依頼し、当日それを確認しながら聞き取りを進められるようにしている。

#### (6) 説明と同意

最初に聞き取りの候補者へ打診を行う際、何らかのつてを得てできるかぎり事前に資料室の存在とオーラルヒストリー収集の取り組みについて紹介する。そのうえで資料室から書面、電話で聞き取りへの協力依頼を行っている。大学史委員会も資料室も、構成員の多くが本学卒業生であり、聞き取り候補者にとっては母校の関係者であるだけでなく直接の後輩にあたるため、最初からある程度の信用関係を築くことができ、おおむね好意的に承諾いただけている。

依頼不承諾の場合、理由のほとんどが体調不良である。また自分はあえて語るべき業績がないと謙遜されるケースもあるが、些細な学生時代の思い出や当時の教員のエピソード1つだけでも現代においては貴重な資料となること、個人の語りの集積が組織としての歴史を描くことなどを説明して協力をお願いし続けている。こうした聞き取り辞退を減らすために、日ごろから資料室の取り組みを同窓会報などで紹介していくなどの情報発信を行っている。「大きな業績についてではなく、日常的な思い出話でも資料となりうる」という例を示すことで、今後のオーラルヒストリー収集について理解を得られることを期待している。

実施の内諾が得られたら、依頼状を送付している。ここに実施日時・場所などを記載するとともに、オーラルヒストリー収集の趣旨を改めて説明している。聞き取りを実施することについての同意書を作成し事前に署名いただくことは、あえて行っていない。研究調査活動においては「辞退の自由」「中断する権利」などを明記した同意書にサインをもらうことで、研究倫理の問題をクリアするのが常であろう。しかし最近の契約文化になじまない年配の卒業生にとっては、同意書に署名したことに責任を感じてかえって辞退や中断をしづらくさせてしまうという指摘もある<sup>21)</sup>。聞き取り対象者と聞き取り実施者が先輩・後輩の関係であることによる信頼

21) 前掲注18。

関係のもと、聞き取りの場において、語りたくない話題を回避するなどの配慮を持って対応することとしている。今後は、依頼状に「辞退の自由」「中断する権利」などを記載するなど、署名による拘束感を生まずに語り手の権利を説明する工夫や、若い世代を対象とした実施同意書の検討が必要だろう。

聞き取り取得後、その場で保存・公開に関する同意書に署名をお願いしている。同意の内容はインタビュー内容の公開、録音データの公開、録画データの公開についてそれぞれ公開の可否を選択できるようなフォーマットとしている。これについては改善の必要があり、5-(1)「本学オーラルヒストリー収集の課題」で詳しく述べる。

### （7）逐語録作成と本人への確認

録音データをテープ起こしした逐語録作成は業者に外注している。その後、業者が文字起こせなかった固有名称の漢字や、看護の専門用語などを、卒業生によるアルバイトが修正している。

テープ起こしの作業は、誰が行っても同じものができあがる単純作業ではなく、聞き手、または聞き取りの場に居合わせた者が作業するのが望ましいとされている。しかし作業負担が非常に大きく人的コストもかかるため、本学の組織形態では外注以外の選択肢はありえないといっても過言ではない。

せめて逐語録の修正作業は聞き取りの場に居合わせた大学史委員が行えば、発言に付随する笑いや身振りを記録に加えたり、発言が文字通りを意味するのか比喩であるのかなどの解釈を残すことができ、語りの真意をより正確に後世に伝えることができる。しかしこれすら大学史委員が教職員としての本業の合間に取り組むには負担が大きく、細切れの時間でなんとか作業を進めても完了までに非常に時間がかかってしまう。修正した逐語録を語り手に送付し、確認を依頼する必要があることを考えると、作業をあまり先延ばしにはできないため、アルバイトへの委託もやむをえない選択となっている。

そこで最低限聞き手の解釈を記録に残せるよう、聞き手による語りの要約を別途作成している。これは、外注した逐語録の完成を待たず、聞き取り実施直後に記憶とメモ書きを元に作成するため、聞き漏らした話題があったり聞き間違えた内容が記録されている可能性に注意する必要がある。

以上の実態から、本学における逐語録作成には、聞き取りの記録が二重に作成されてしまうという問題、2種類の記録がそれぞれ語りの解釈に誤解を生む危険性を持っているという問題があることが指摘できる。この解決のために、修正された逐語録を元に語りの要約を修正することが必要であると考えられる。

本来、逐語録が作成された後に、それを語り手本人に確認してもらう必要がある。しかし本学では、これまでの45件の収集において1件も本人確認が完了していない。理由は2011年まで逐語録修正作業が未着手で、本人校正を依頼できなかったからである。本人校正の必要性については、5-(1)で詳しく述べる。

### （8）記録の作成と保存

聞き取りの記録は、逐語録に、以下のような項目を記録した実施概要を作成、付与して保存

している。

実施概要の項目は、実施日時、場所、聞き取り実施者名、座席配置、録音・録画機材、録音・録画時間とデータ種類、対象者略歴、主な話題、寄贈（借用）資料、聞き取り実施時に感じた注意点である。

これらの情報を記録するのは、収集した語りの内容が後世において検証される際、証拠性を担保するためである。どのような経緯で対象者が選定されどのような状況で聞き取りが実施されたかや、対象者の語りについての聞き手の解釈などは、逐語録からは読み取れない。しかし語りの背景にある本音や語りの場にいれば伝わるであろう発言の微妙なニュアンスなどは、それらの情報がないと汲み取ることができない。「対象者は発言に慎重であった分、聞き手の問いかけが誘導的になっても流されて同意するようなことはなかった」「語り手は本学で学んだことに大きな誇りを感じており、現在の大学についても当時と同様の印象を持たれているようであった」など、当事者にしか残せない情報を記録することで、録音データや逐語録の価値を担保することにつながる。主観的な解釈を記録に残すことに懸念を示す向きもあるかと思うが、そもそもオーラルヒストリーは完全なる客観的史料ではない。聞き手によって語りの方向性が影響されたり、語り手と聞き手の信頼関係によってその場でしか得られない語りが生まれたりする、一期一会の共同作品とすることができる<sup>22)</sup>。よって重要なのは、聞き取りを実施した現場の様子が、その場にいなかった人にもわかるような記録を残すこと。また語り手と聞き手の関係性がわかるような事前準備のやり取りなどを記録に残すことと考えられる。

収集・作成された資料は、すべて資料室によって永久保存の予定である。インタビューごとにファイルに綴じて資料室内のキャビネットに配架している。ファイリングされる資料は、依頼状複製、事前送付資料、実施概要記録、DVD・CD-R（録音データ、録画データ、写真データ）、寄贈・借用資料の複写、逐語録、アルバイト修正後の逐語録、要約、公開の同意書などである。

## (9) 記録の利用

これまでにオーラルヒストリーを利用した実績として以下がある。

- 1) 大学史委員によるグループインタビュー収集事例について学会で発表した。
- 2) 大学史委員による看護史についての学会発表においてオーラルヒストリーの一部を引用した。
- 3) 語り手本人の回顧録執筆資料として、本人と共著者に対し収集データを提供した。

このような具体的な利用の他に、オーラルヒストリーで得た情報をきっかけに歴史調査を進めたり、編纂準備中である創立100周年史執筆の参考資料としたり、成果物には姿を現さないながらも大学史編纂の継続的な作業において有用な資料となっている。しかし現在は、大学史委員会または資料室による参照という事業実施者による利用にほぼ限定されている。これはそれ以外への資料提供体制が整っていないからだけにすぎない。これについては、5-(1)で詳しく述べる。また2)においては語り手の個人名は出していない。公開に対して同意を得られている

22) 前掲注5。

オーラルヒストリー資料を大学史委員が利用するにあたり、発言者を明らかにすべきかは今後の検討課題である<sup>23)</sup>。

## 5. 考察

### （1）本学におけるオーラルヒストリー収集の課題

第4節で見てきたように、本学のオーラルヒストリー収集手法には様々な問題点が指摘される。本節では大学アーカイブズにおいて優先して取り組むべきと考えられる大きな課題3点について実態を述べる。

まず語り手による逐語録の本人校正であるが、オーラルヒストリーであれば必ずこれを行わなければならないという規定はない。しかし筆者は、大学アーカイブズのオーラルヒストリーにおいては、本人校正は必ず行うべき行程と考える。お茶の水女子大学が卒業生に行ったオーラルヒストリーでは、語り手の納得がいくまで公開を許諾できる形に校正を進めた結果、逐語録原稿が語り手による手記の形式に変更されることがあってもすべて本人の意思を尊重するという、対象者の意思を最優先にする方針を明確に打ち出した。その結果、ほとんどの語り手が今後の公開に同意したという<sup>24)</sup>。この例からもわかるとおり、語り手が逐語録を読み返し、自分が意図したことが伝わらない表現になっていた場合に変更したり、公開してほしくない箇所を削除したりできることは、収集した語りを公開することに同意してもらうための重要な要素となるのである。また大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーは、1つの研究プロジェクトによるそれと異なり、永きにわたって保存される。プロジェクトのメンバーだけが収集データを分析し、結果を刊行物にまとめることでそのオーラルヒストリーの利用も完了するケースとは違い、遠い将来にも学内外の研究者によって繰り返し利用され続ける可能性がある。このように、語り手と直接信頼関係を構築していない多様な研究者が収集データを扱うときにも、語り手の本意ではない内容が公開されたりしないようにするためには、本人校正によって公開を承諾できる内容に改めておくことが肝要である。さらに、このような対策を講じることは、これからオーラルヒストリーを収集する聞き取り対象者に安心感を与え、豊かな語りを引き出すためにも重要であることを指摘したい。また本人校正は非公開部分の確認だけでなく、語り忘れていたことを追加してもらえたり不明確だった事柄について検証されたりと、情報の正確性が高まるメリットがあることも加えておく。

次に本学における保存・公開の同意書のありかたにおいて、いくつかの懸念を指摘する。1つ目に聞き取り終了後の慌しい状況において同意を依頼することで、逡巡する時間もなく署名せざるを得ない状況に対象者が追い込まれていること。2つ目には、原則として公開を許諾す

23) 安倍は「オーラルヒストリーを社会学の研究論文において（略）語り手自身は匿名で扱われることも多く、必ずしも顔を持った存在として特定される必要がない。しかし、オーラルヒストリーでは、他ならぬその人がその時に発した言葉や、記録自体が重要になってくる。」と指摘している（安倍尚紀・加藤直子「組織的に体系化されたオーラルヒストリー—研究機関に基盤を置き、組織的な研究方法を用いるオーラルヒストリーの可能性—」『日本オーラル・ヒストリー研究』2008(4), p.65-84)。

24) 和田華子「大学史資料としてのオーラルヒストリー」『お茶の水史学』2008(51), p.123-41。

るのだがしばらくは非公開にしてほしいという場合や、研究資料として供してもかまわないが刊行物にはしたくない場合など、非公開の年限や利用範囲の選択ができないことである。これらの懸念を解決するため、公開に関する同意書は逐語録の校正後に送付し、時間をかけて検討、決断できるようにすべきであると考え。また本学の現行同意書のように公開可能な各データ形式を選ぶ書式では、語り手の意向を汲み取れず、公開もしくは非公開の二者択一となってしまう。しかし、語り手が望む場合には、情報の公開や利用の制限等について、語り手の意向をできるだけ尊重することが重要になる<sup>25)</sup>。つまり語り手が非公開を希望する部分だけを削除したり、公開までの時限措置を提案したりして、極力多くのデータを広く公開できるようにコミュニケーションを取り、それに沿った保存・公開同意書をつどつど作成する必要があるのである。これには先に述べた逐語録の本人校正を経て公開したくない語りの部分を明確にすることがまず必要となる。そしてその結果について要旨・逐語録から削除するのか、時限をもうけて非公開の措置をとるのか、逐語録の元となる録音データ・録画データなどは研究資料として閲覧を認めてよいかなどを相談してから、それを盛り込んだ書式を作成するのが望ましいと考える。これは、後世の研究者が要旨から録音データまでなるべく多くの資料を利用できるようにするための環境を整えるためであり、一回の利用だけを目的としない、アーカイブズとしてのオーラルヒストリーとして特徴づけられる対応と考える。

最後に記録の利用体制整備の必要性について述べる。資料は、利用されなくては収集した意味がない。そこで第一に収集データの目録を作成することが不可欠である。これは、EXCEL一覧表を作成して資料室内で閲覧可能にすることで良しとすべきではない。データベース化して学外にも公開すべきであると考え。なぜなら、資料は存在を開示しない限り利用され得ないからである。次に利用規程を設けて、利用者の範囲と利用可能な資料の範囲を定める必要がある。このときに考えなければならないのは、大学アーカイブズとしてのオーラルヒストリーは、学外からの閲覧・利用に供されるべきか、それとも組織オーラルなのだからその組織内で分析・利用が行えればよいとするのかという問題である。これについて、筆者は前者を主張したい。なぜなら、大学アーカイブズは資料を自ら抱え込むことを目的としているわけではなく、広く社会に公開することを前提としているからである。さらに言えば資料を見る側が客体としての位置に立つ展示や資料編纂ではなく、利用者が資料利用の主体となる閲覧を行うことが重要なのである<sup>26)</sup>。その他にも規程制定に際して検討すべき点は多くある。広く学外からも利用を受け付けるとして、利用目的を研究活動のみの利用に制限するのか、商業目的の利用も認めるか(本学資料室の経験としては、テレビ番組の裏付け資料を求めるレファレンス依頼などが寄せられる)。ファイルは学内閲覧のみとするのか、複製の持ち出しを認めるのか。語り手本人による公開許諾は得ていても、語りに登場する人物や組織の権利利益を損なう恐れのある情報についてはどうするか。引用にとどまらず、語りが主となる刊行物作成について、著作権をどのように管理するか。詳細は個々の組織における環境などに応じて定めざるを得ないであろうが、大学アーカイブズであるならば、どの点についても学外に広く公開するという可能性を念

25) 中島康比古「オーラル・ヒストリー・アーカイブ—可能性と課題」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007。

26) 前掲注14。



頭において検討されるべきであることに変わりはないだろう。

## （２）大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリー収集の手法

大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーを１）大学組織運営の経営知としての資料、２）大学活動の主体者である学生（卒業生）の活動に関する資料、と位置づける。また前項で述べたとおり大学アーカイブズとしては収集した資料を学外に公開することを前提とすべきであるとの立場をとる。すると大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリーの収集手法においても、必ず行うべき行程が自ずと見えてくる。

①まず実施概要の作成である。収集した語りの内容を検証するための証拠性を担保するためである。次に②本人校正と③公開・保存の同意書の取得である。これは、語り手の権利利益保護を第一に尊重しながらも、可能な限りの収集データを公開につなげるためである。そして学外公開のための④データベース化と⑤利用規程整備である。

以上５つの行程を挙げたが、それ以外の作業をおろそかにしてよいというわけではない。ただ、つい「いかに聞き取りの内容を深めるか」「いかに逐語録の質を高めるか」という点に注意が向きがちであるが、大学アーカイブズのオーラルヒストリーであるならば、以上の５点が重要であることを認識した上で、時間と労力の配分を行うべきであると考ええる。

## （３）今後の研究課題

さらに踏み込んで考察したいのが、録音データ・録画データの保存と公開、そしてWebアーカイブの構築についてである。これらは技術・機材の普及によって近年になって広く用いられるようになり、したがってそのノウハウ蓄積の歴史は紙の逐語録よりも短い。

前節で大学アーカイブズであるならばオーラルヒストリー資料も公開を前提とすべきと述べたが、公開の範囲と方法にも多様な選択肢がある。すべてを公開するか、逐語録のみを公開するか、録画データを公開して逐語録を作成しない方針とするか。アーカイブズにおける閲覧利用のみか、Web公開するか、利用者による複製を可能とするか等も各大学によってそれぞれの考え方があってしかるべきであろう。しかし筆者は、大学アーカイブズとしての理想は録音データ・録画データを含むすべての資料を保存・公開することであると考ええる。なぜなら録音データ・録画データにあって紙の逐語録にはない非言語情報（身振り、表情、間合い等）も含めたすべての情報が保存・公開されてこそ、他人が収集したオーラルヒストリーを用いた追検証が可能になり、多くの研究者に活用されるデータの提供となりうるからである。ただし、録音データが公開される前提であると語り手が語りの範囲を狭める懸念、録画すること自体が語りの質に与える影響を考えて、逐語録だけを公開する方針や録画を行わない方針のアーカイブズもあるのが現状である。しかし技術の進歩と機材の小型化、人々がそれらの技術に慣れるにしたがって、それらのリスクは小さくなっていくことも報告されている<sup>27)</sup>。今後のオーラルヒストリー事例の蓄積から、録音データ、録画データ等のあらゆるデータの公開が可能となる体制についても検討していきたい。

27) 中尾知代「戦争・植民地にかかわるビジュアルオーラルヒストリーの方法」『史資料ハブ』2003(2)、p.31-49。

## 6. 結語

本学の事例を通して、オーラルヒストリーの大学アーカイブズにおける存在意義が確認された。また大学アーカイブズの資料であるからこそ行うべきオーラルヒストリー収集手法を考察し、重要な行程として①実施概要の作成、②語り手本人による校正、③公開・保存の同意書取得、④目録公開、⑤利用規程整備の5点を指摘した。それらは本学においてほとんど手つかずの行程であったが、その理由は多様なオーラルヒストリーの手法に関する情報からどの部分を参考にすべきか判断が難しかったこと、それらの行程の重要性を正しく認識していなかったことが大きい。

今後は、永続的な公開を意識して資料の公開体制についてより留意し、学外研究者による教育史や看護史など多様な研究に資するオーラルヒストリーコレクションの構築を目指すとともに、試行錯誤しながらではあるがオーラルヒストリーを継続収集している組織として経験を公開し、オーラルヒストリーやアーカイブズ学の発展に少しでも寄与することができれば幸いである。

## 謝辞

本稿は2012年度アーカイブズ・カレッジ（長期コース）修了論文「聖路加看護大学におけるオーラルヒストリー収集の手法」を加筆・修正したものである。修了論文の作成にあたっては国文学研究資料館教授の青木睦氏にご指導いただいた。また聖路加看護大学大学史編纂・資料室の渡部尚子室長、学術情報課の松本直子課長から、執筆の助言と励ましをいただいた。この場を借りて心から御礼申し上げます。最後に、これまでオーラルヒストリー収集にご協力いただいたすべての関係者と、大学史編纂・資料室委員に感謝いたします。